

街歩き 077 伊勢の台所 河崎商人町



狭い道の両側に妻入りの商家が並ぶ



平成 11 年まで造り酒屋だった商人館

川沿いには、蔵が並ぶ



刻み囲い等の雨風を防ぐ
工夫を凝らした建屋

photo 2018.4.23

張り出し南張り囲いという
独特の建築様式が目を引く



～三重県伊勢市河崎町～

河崎は、伊勢市の中心を流れる全長 7 キロ余りの勢田川の中流域両側に広がる町である。勢田川の水運を生かした問屋街として知られ、特に江戸時代からは伊勢神宮の参宮客への物資を供給する「伊勢の台所」として栄えた。当時は蔵や町家が川の両岸に建ち並び、直接船から物資を蔵に入れることができるようになっていた（伊勢河崎商人館HPより）。そんな歴史に取り残されたかのような街に出会った。

切妻の町家が曲がりくねった道に沿って妻入りで並ぶ。神宮の正殿が平入り作りのため同じ構造では畏れ多いと妻入りの家が多いという説もあるようだが、出来るだけ多くの建物を道や川に面して建てたいといった配慮や雨の多い地ならではかもしれない。

蔵や町家の刻み囲いの外観、特にこの地独特の張り出し南張り囲いには、重厚感が漂う。これは、風雨への備えで、土壁に漆喰を塗った上に、「刻み囲い」と呼ばれる下見板張りを施し、さらに屋根と壁の隙間からの吹込みを防ぐ目的で付けられた「張り出し南張り囲い」という 2 階部の張り出し構造が目を引く。思えば、おはらい町の赤福本店も同じ構造だ。嘗ては、「濡れガラス」と呼ばれる魚の油と煤（すす）を混ぜた塗料で塗装したという。エイジングした黒塗りの壁が街の情緒を一層味わい深くしている。

屋根も「むくり」や「反り」「すぐ」が混在しており、立派な鬼瓦とともに切妻の両端には、河崎独特の隅蓋（右下写真の左上部）と呼ばれる飾り瓦が見られる。これも水が建物に入り込むのを防ぐ蓋の役割を持つもので、風雨への備えがいかに重要だったかを物語る。同時に、波や蛙、亀など水に関するものを象ったものが多いことから、火災から屋敷を守る願いも込められているのだろう。（2018.8.20 記）